

みやんな

# 宮ノ浦遺跡

—2013年度(第3次)発掘調査の成果—

愛媛大学考古学研究室は、上島町教育委員会とともに3年前より、愛媛県上島町弓削佐島に所在する宮ノ浦遺跡にて発掘調査をしています。昨年度までの調査で、古墳時代前期の製塩土器の存在、また、中世の揚浜式塩田の存在を確認するなど、時代を越えた製塩活動があったことを突き止めています。

今回の調査は、大きく(1)古墳時代前期の製塩土器を含む層の範囲確認、(2)中世揚浜式塩田の範囲確認、という目的で調査を行いました。また、この調査は、滋賀県立大学や、「塩業考古学」研究の盛んな中国・山東大学、四川大学の学生も参加しました。塩が当時の社会に与えた影響を国際的に議論する舞台として、この宮ノ浦遺跡への期待が高まっています。



## 多量に出土した古墳時代製塩土器

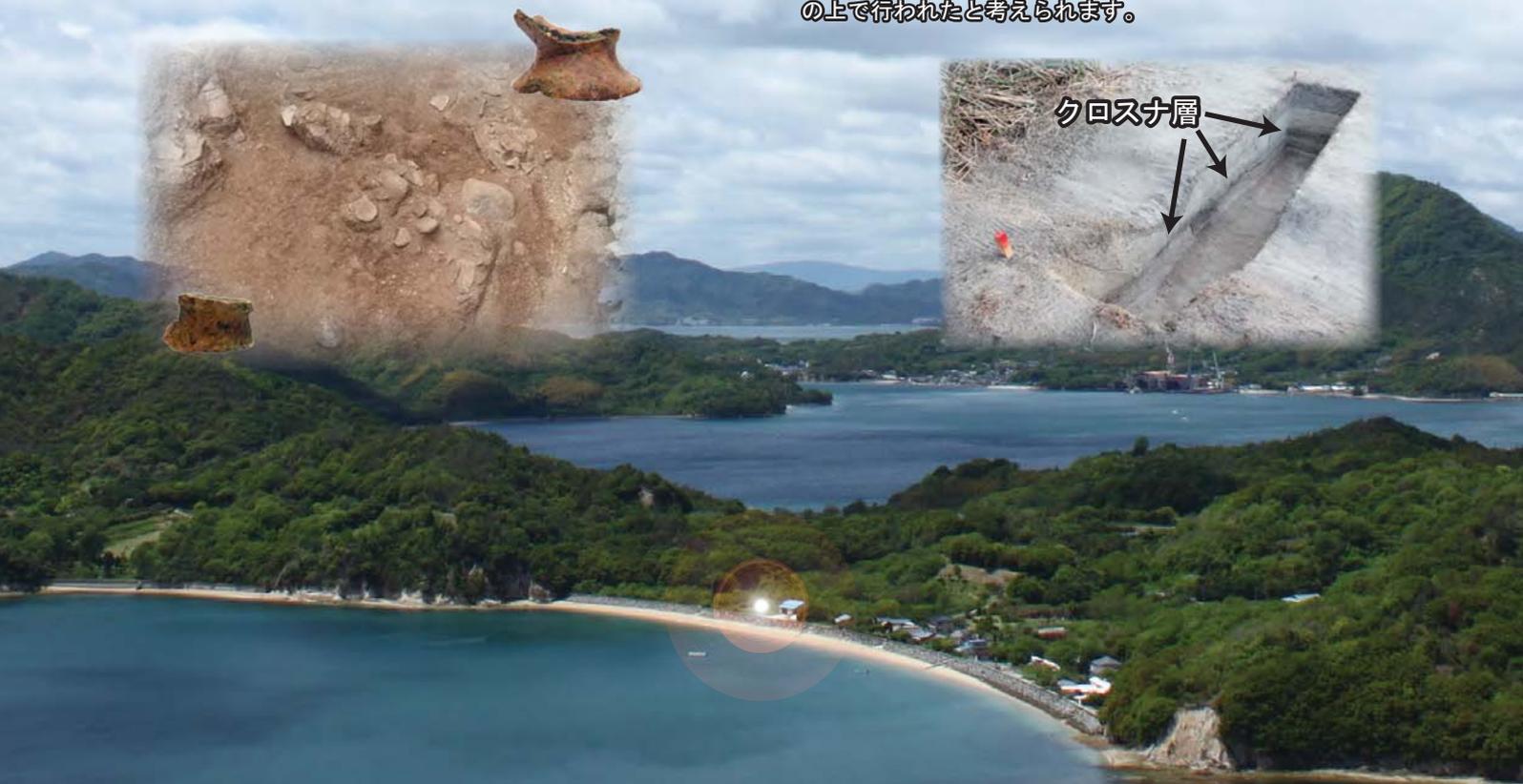
現代のゴミ穴を利用して、中世塩田層の破壊を最小限にしなが、下にある古墳時代の地層を調査しました。その結果、古墳時代前期の高台がついた製塩土器(脚台式製塩土器)や、日常生活で用いられた土師器などが多量に出土しました。

また、脚台の大きさが異なる脚台式製塩土器が出土しており、古墳時代前期を通して、製塩活動を行っていた可能性があります。

## 「クロスナ層」の発見

宮ノ浦遺跡は、風に運ばれた砂が堆積したり、砂の堆積が停まったりしながら、現在のような地形になりました。西日本のような温暖な地域では、砂の堆積が停まると、草木が繁茂し、腐植土が堆積してゆきます。これを「クロスナ(黒砂)層」といいます。

宮ノ浦遺跡では、現地表から50~60cm下で「クロスナ層」を検出しました。古墳時代の製塩活動は、この「クロスナ層」の上で行われたと考えられます。



## 中世塩田整地層の範囲を確認

遺跡北側および北西側では、表土層の下層より近世遺物が出土し、中世塩田整地層のほか、新たに近世層の存在が確認できました。これが、近世の塩田に伴う整地層かは、今後検討しなければなりません。

塩田整地層北側と湿地帯との境に、土手状の遺構があり、整地層の土留めとして機能していたと思われます。同時に、これは塩田の北の境界と考えられます。



## 環境学的な調査も

当時の製塩活動は、多量の燃料（薪）が必要で、周辺の森林を伐採し、利用した可能性もあります。そこで、製塩活動が自然環境に対して与えた影響やダメージなどを調査すべく、環境学の専門家を招聘し、遺跡の北に広がる後背湿地のボーリング調査を実施しました。採取した花粉から当時の植生を復元でき、また木炭から年代を測定することができます。

この宮ノ浦遺跡のような、古墳時代から中世にかけて時代を越えた製塩遺跡は、全国的にも例が多くありません。将来的な国史跡指定申請も視野に、今後も調査・研究を進めてゆきます。

## 弓削島で初の考古学的調査（下弓削・岳の下地区、上弓削・高浜八幡神社試掘）

さらに、弓削島にも、初めてとなる考古学的調査のメスを入れることができました。弓削島は、京都の東寺（教王護国寺）に塩を納めた荘園“弓削嶋荘”として、国宝の『東寺百合文書』に記載があるなど、古くから塩の生産地として有名です。

2か所で試掘調査を実施し、下弓削・岳の下地区では、13世紀前半にまで遡る土師器が出土しました。弓削島では初の“弓削嶋荘”時代の土器の発見です。ユネスコの世界記憶遺産に推薦された『東寺百合文書』とあわせて、弓削島における製塩の歴史を解明する、大きな一歩となりました。



上：宮ノ浦遺跡近景（北から）

下：弓削島・久司山展望台から弓削島北半を望む（矢印が下弓削・岳の下地区試掘地点）